

## 保田與重郎の思想形成に関する一考察——美術との関わりに着目して

遠藤 太良 (京都大学)

---

昭和期の思想家保田與重郎は、日本の古典文学を取り上げる一連の批評で知られている。そうした彼の思想形成についてはこれまで、マルクス主義、近世国学、ドイツロマン派の三つが大きな役割を果たしたとされてきた。とはいえ、こうした見解には「日本の古典の信奉者」という後年に一般的となる保田のイメージが大きな影響を与えており、その文業の初期において、ドイツロマン派など西洋の文学や思想に親しんでいた彼が日本の古典に関心を持つようになった契機を十分に説明できていないという問題がある。それゆえ、本発表では、後年の保田のイメージに捉われることなく、その初期の文業を当時の交友関係なども踏まえつつ網羅的に考察し、この思想家の日本の古典への関心がいかに形成されていったのかを明らかにする。

まず、保田の初期の文業について、取り上げられるジャンルの変遷について年代毎に考察する。その後、保田が親しく交流していた人物について、彼らが発表する作品などと保田の著作の関連について検討を行う。

以上の考察を通して明らかとなるのは、保田が日本の古典に対して関心を持った一つの契機として、美術が重要な役割を果たしていたということである。初期の保田の論考において、主として論じられていたのは、先に述べたドイツロマン派などの西洋の文学や思想、同時代の日本の文学のほか、日本の古美術であった。すなわち、日本の古典文学に先んじて古美術についての批評が展開されていたのである。また、それらの古美術は保田の故郷である奈良桜井に関連するものが多く、当時の文学運動において「故郷」ということが一つの大きなトピックとなっていたことを踏まえれば、保田は自身の「故郷」の価値を示すものとしてそれら古美術を取り上げたといえる。そして、古美術を語る中での前近代への評価はそのまま後年の古典文学についての論考へと受け継がれていることから、古美術が保田の古典文学への関心に一定の影響を与えたと考えられる。

また、保田の古典への関心には上記の古美術だけでなく、同時代の美術の影響も指摘できる。その最たる例が棟方志功および彼が描いた《大和し美し》である。『古事記』における日本武尊の物語を描いたこの絵画の数か月後、保田もまた同じ主題を論じた「戴冠詩人の御一人者」を発表している。二人はこの作品以前より親しく交流していたことや一般的に武人として捉えられてきた日本武尊を三人の女性との関連の中で解釈している点が共通していることから、戦前の保田の古典批評を代表するこの著作に棟方およびその作品が一定の影響を与えていたといえる。

保田の思想の形成に美術が一定の役割を果たしていたことを示す本発表は、その生前よりし

ばしば問題とされてきた「日本」や「伝統」に関するこの思想家の見解の実相を明らかにすることに寄与するものであり、日本の美学史や文学史を研究する上で重要なものとなるだろう。